

山林所有者の“山への愛ある意思”形成に対する「お手伝い」の検討と実践

森と木のクリエイター科 林業専攻 後藤里花

1. 研究の背景と目的

山が負担という所有者と話を重ねると、本当の悩みは「山をどうしたらいいか分からない」という事だと分かった。

本研究は、所有者が山の管理の選択肢を知り、“山への愛ある意思”、つまり「所有者が自身の山に向き合い、山（ひいては地域に）前向きに関わる意思」を醸成するために必要な「お手伝い」を模索し検証した記録である。

2. 実践

<実践1> 「課題の整理」

本研究にあたり美濃市入会林の所有・管理組織「誕生山林合資会社（以下、誕生山）」の役員、梅田宏之氏に協力をいただいた。ヒアリングから主な3点の課題が分かった。



梅田宏之さん（美濃市極楽寺自治会長）

課題①「経済的負担」

会社は平成初期まではマツタケの入札で収入を得ていたが、誰も山の手入れに入らなくなり、マツタケが取れなくなってから、定期収入が無い状態が続いている。

課題②「組織運営の負担」

所有山林はすべて保安林に指定されているため固定資産税はかからない。一方、会社（法人）であるがゆえに、毎年の法人税、さらに代表交代時の登記変更などに、金銭および事務的負担がかかっている。

課題③「一人で悩む山林所有者」

誕生山は、美濃市の極楽寺と笠神地域の自治会長が長となり、自治組織（組）の各組長で役員会を構成し運営している。役員会の中では「山は厄介者」という認識が強く、なるべく山のことを考えたくないという雰囲気のため、自治会の長となる方が、主に一人で山の整備や法人運営の今後を

検討しているとのことだった。

<実践2> 「調べる・伝える」

梅田さんが抱える課題にアプローチするために、他事例の調査を行った。地域住民の負担が少ない山林所有の形態を探るため、入会林の種類やそれぞれの共同管理制度、また入会林管理主体として、自治体などの地域団体が法人格を持つ「認可地縁団体」について調査した。

入会林野研究者へのヒアリング

「森林幸福度」を研究する滋賀県立大学の高橋卓也教授に山林所有者が抱える課題について伺った。また高橋教授の紹介で「中部入会林研究会」に参加した。参加した研究者に調査内容を共有し意見を求めた。

さらに研究会の委員でもあり入会林野研究の第一人者である東京農業大学の山下詠子准教授から、共有林管理組織の種類や、それぞれのメリット・デメリットについて助言をいただいた。

認可地縁団体の事例調査

美濃加茂市三和町の中廿屋自治会および下廿屋自治会では、自治会を「認可地縁団体」として法人化し、個人で所有していた山林を団体（実質は自治会）の所有に移行している。どちらの地区でも、住民主導の取り組みとなっている。

山林整理をとりまとめた担当者（当時市の職員）にうかがったところ、三和町では以前から地域づくり協議会が活発に活動していて、“町を自分たちで作っていく”という住民意識が非常に高い地域ということだった。

<実践3> 「みんなで考える場づくり」

事例調査から、地域づくりのためには<円滑な合意形成>を生むための<地域で話し合える場>、そして<住民からの主体的な行動を生む雰囲気づくり>を担う、長期的目線を持った組織の存在が大切であることを知った。美濃加茂市の事例に対して、美濃市では1年任期の自治会役員が主な負担を負っており、地域ぐる

みの継続的な活動が難しい状態にある。

美濃市には誕生山林合資会社以外に、共有林の管理組織である合資会社が少なくとも5つ存在するが、交流などはこれまで無かったため、組織運営の情報共有、お悩み相談の場として、互いに対話できる場づくりを行った。

共有林管理組織同士の初会合を開催



初会合の様子、山のお悩み相談だが、皆さん楽しそう

2024年9月19日、前野山林合資会社役員の市原さん、笠神自治会長の古川さんが集まり、美濃市初の合資会社役員の会合を行った。普段組織内では話すことが出来ない互いの悩みが話され、終了後、梅田さんからは「近くにいる同じ境遇の組織と思いを共有できたことで、今後の組織運営の参考になった。会えてよかった」という言葉が述べられた。

他地域の事例や、市内の他の合資会社の人々との対話を経て、梅田さんには「厄介者だと思っていた山を経営できないか」という気持ちが芽生え始めていた。



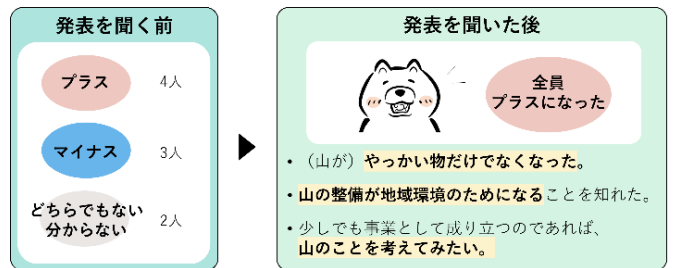
誕生山林合資会社の方々への事業プラン発表会

梅田さんの希望に応えるため、山林の未活用部分について事業プランを作成した。対象地全体を踏査し、道の設計、木材販売の試算を行った結果、所有者に利益が生まれ、さらに環境整備のための間伐も可能であることを提案できた。

2025年1月14日、作成した事業プランの説明会を行ったところ、梅田さんの予想も超えて13名の社員（法人の構成員である区民の方々）が集まり、梅田さんも驚いていた。

「誕生山林（誕生山林合資会社所有山林）のイメージが発表を聞いて変化したか」アンケートを取ったところ、森林整備の環境・防災・景観面への効果を知ったことで、参加者全員イメージがプラスに転じていたことが示された。

こうして、山の次世代への負担に悩まされていた梅田さんに、<森林経営の可能性>、その利益から次世代のための健全な山づくりへの一歩>を伝えることが出来た。



<アンケート結果①> 誕生山林に対するイメージの変化

No.	項目	回答数
①	地球温暖化防止	4
②	治山治水・災害防止	8
③	水源の森	6
④	人が入れる・活動できる	5
⑤	多様な生物が生息できる	4
⑥	木材生産ができる	0
⑦	キノコなど森林資源を取ることができる	0
⑧	地域に誇れる美しい景観	6
⑨	特に期待していない	0
⑩	その他	0

<アンケート結果②> 誕生山林に求めるもの(複数回答可)

3. まとめ

<①山の情報が見えた><②山林経営と環境保全の両立という選択肢を持たせた>という梅田さん。一連のお手伝いを通して、「これからは、少し明るい気持ちで山に関われる」という言葉をいただいた。

この研究から、「山への愛ある意思」を醸成するための「お手伝い」には、当人の話を丁寧に聞いて悩みに寄り添い、その上で、専門家として山の可視化、管理・活用について複数の選択肢を示せる能力が求められることが分かった。

山と所有者の双方を理解し、山を管理する人々への敬意、そして感謝を伝えることのできる「山とひとの仲介人」がこれからより必要とされるのではないだろうか。

4. 今後の活動

今回は法人の代表一人を通した話だが、これが地域としての山への意思、より多くの方の山への参加意識につながれば、山が厄介者から地域の財産へと変わっていく。それこそ私の思う「地域と山・人の幸せな関係」である。

山に向き合う所有者の、山への愛を大切にしたい。そのため技術と経験を増やししながら、山と人の関係性を幸せにできる、山の想い、人の想いの仲介者になりたい。